ミンダナオ子ども図書館・漂流記

序

「この先のイスラム地域で戦争が起こり、大変なことになっているが、いっしょに行ってみますか？」

ある日、突然、泊めていただいていた司教館の二階の窓辺で、バリエス司教が興奮したように話し出した。

司教館の二階のガラス窓からは、庭に生えているラワンやマホガニーの熱帯樹木の木陰から枝越しに、強い陽ざしが流れこんできて、質素な白いガウンに身をつつんだ司教の横顔を照らし出していた。

とつぜんの誘いに困惑気味のぼくに向かって、バリエス司教は、ふだんの穏やかで平和な雰囲気とは異なる厳しい表情で、興奮ぎみに言葉を続けた。

「フィリピン軍とアメリカ軍の合同演習による空爆もうけて、リグアサン湿原地帯にすんでいる大量のイスラム教徒たちが、ピキットの街周辺に避難してきている。

現地のカトリック教会は、ときには爆弾の落ちるなか、ライソン神父を中心に、イスラム難民の救済に奔走しているが、とても手が回らない状況だ。手伝いに行かなくてはいけない！」

ミンダナオでは、ときどき戦闘が起こることは聞いていた。

共産ゲリラと呼ばれるＮＰＡ（新人民軍）と国軍。イスラム反政府組織と政府軍の間に、四十年以上にわたって戦闘があり、そこにリドーと呼ばれる地域の有力者同士の小競り合いも加わって、そのたびに避難民が出る、という話も耳にはしていたが・・・。

これは後でわかったことだが、国連の調べでは、戦争や戦闘による避難民の累計が、当時世界で最も多いのがミンダナオだったのだ。

しかし、そんなことはついぞ知らず、本物の武器を手に取ったり、身近に見たことすら無いほどの、平和な日本に生まれて育ったぼくには、戦争はたとえ小耳に挟んだとしても、まったく実感のないものだった。

「難民キャンプ」という言葉を聞いても、全く想像が働かない。キャンプというからには、避難民はテントに収容されているのだろう、というぐらいのイメージしか無かったのだから！

ガラス窓から明るい陽ざしが転がりこんでくるだけの、平和としか言いようのない、司教館の二階の窓の外からは、小鳥たちのさえずりが聞こえてきた。

興奮気味に話すバリエス司教の言葉にも、ほとんど特別な反応をしめすこともなく、言われるままに準備すると、司教館の車に乗せてもらい、ぼくたちはイスラム地域ピキットに向かって出発した。

1，ミンダナオ子ども図書館を始めた直接的なきっかけ

ミンダナオ子ども図書館を始めた直接的なきっかけは、当時滞在していたキダパワンの司教館から、一時間半ほど西へ行ったイスラム地域、ピキットで大量の戦争避難民を見せつけられたからだった。

２０００年の当事、この地域では、フィリピン軍とアメ リカ軍とによる合同演習（現地ではバリカタンと呼ばれている）が行われていた。

バリエス司教に案内されて、はじめてピキットの難民キャンプを訪れた時には、ミンダナオに足を踏み入れるようになってから、一年ほどたっていたのだが、ぼくは合同演習のことすら知らなかった。

ミンダナオの子どもたちの事や、自然のなかで素朴な生活をしている漁民や先住民の暮らしには関心を持っていたものの、社会情勢には、とんと関心が無かった。テレビを見たり、新聞を読んだりする気になれなかったこともあるが・・・

「合同演習」という言葉を聞いても、日本にいた頃に想像していたのは、住民や市民に影響をおよぼさない、海や空や特定の陸といった地域で、模擬的にドンパチやるていどの事だと思っていたが、とんでもない！

当時、ミンダナオで起こっていたことは、「演習とは名ばかりの、実戦」だったのだ。
迷彩服すがたの軍人たちが、鉄砲を胸に抱いて、濃緑の軍用車にすしづめになって国道をひた走り、ピキットの町の広場に集まると、そこを拠点にして、湿原や山岳地帯に乗りこんでいく。戦車が何台も、地煙たてて農道を突進していく。
遠くからは、砲撃音がドーン！、ドドーーン！と聞こえてきて、森のおくからは、機関銃の音が、バラバラっと聞こえてくる。
当時、湿地帯や山岳地帯、時には都市近郊から国道沿いに、命がけで避難してきた難民の数は１００万人。空爆や夜襲のときなど、逃げ遅れた家族の死体を埋める暇も無く河に流したという。
現地は、国際機関や停戦監視団でも容易に入れない高度な危険地域だったのだ。
今でこそミンダナオ子ども図書館は、スタッフもぼくも、連日のように現地に深く入りこんで活動をしているけれど、当時誘ってくださったバリエス司教は車の中で、外国人であるぼくたちに、「絶対に車から離れないこと」をくり返し約束させた。
しかし、現地に着くまでは、そんなことは想像する事も出来なかった。

2，コタバトにぬける国道は、ところどころ壊れているものの

コタバトにぬける国道は、ところどころ壊れて穴が空いているもののとりあえずコンクリートだ。
車は、ドリアンやランブータン、ランソネンスやマンゴスティンといった熱帯果樹のしげる果樹園をぬけ、高原地帯から湿原地帯へと緩い傾斜を下っていった。
濃紺の熱帯樹木のうえには、強いながらもさわやかな光に満ちた熱帯の青空が広がっている。戦争など、想像できない平和な風景だ。
白樺のようなゴムの木の林を横目に、アポ山山麓の高原地帯をくだっていくと平野が広がり、湿原地帯が近づくにつれて田んぼ

が目につき始める。収穫間近の黄色い稲穂の田んぼの隣に、田植えがされたばかりの苗田が広がる風景は独特だ。聞くと、こちらの田んぼは、二・五期作なのだ。

キダパワンとピキットの中間に位置するカバカンを超えると、教会が少なくなり、しだいにイスラム教徒の礼拝所であるモスクが目にとまるようになってきた。

ベールをかむった黒い礼服のイスラム女性が、どうろわきを、やはりベールをかむった少女たちの手を引いて歩いている。金曜日の礼拝が終わって家に帰るところだった。

バリエス司教が、車の助手席からふり返ると言った。

「このあたりは、ＡＲＭＭといってイスラム自治区。もうじきミンダナオ最大の母なる河、プランギ河を渡りますよ。ピキットはもうすぐだ。」

国道ぞいに建つ大きなモスクを横切ってカーブすると、とつぜん目の前が広がり、大きな河が現れた。さすがに、母なる河と呼ばれているだけあって、実に悠々たる大河だ！

ぼくたちを乗せた車は、河にかかる橋を渡りはじめた。

上流は右手で、大蛇のように湾曲して流れる茶色の水流の向こうには、濃緑の丘陵地帯が広がっている。そのさらにはるか遠くには、霞んだような青い山並み。

バリエス司教の話では、山並みは、アポ山にまで広がっているという。

アポ山は、フィリピンの最高峰で、２９５４メートルの高山。周辺には、熱帯雨林であるジャングルが残っていて、先住民とくにマノボ族が多く住んでいるという。そこに降る雨は、多くの支流を集めて高山地帯をかけくだり、濁流となって高原地帯をぬけ、大河プランギに注ぎこみ、そのゆくさきで巨大な湿原を形成している。

後にミンダナオ子ども図書館が設立されると、湿原のイスラム教徒の子どもたちに加えて、アポ山周辺の貧しい先住民族の子どもたちが奨学生となって、読み語りや医療、難民救済活動にたずさわることになるのだが、もちろん当時は、そんなことはまったく考えてもいなかった。

「ボランティア活動」など、いかにも偽善的な自己満足で、うさんくさい！
若い頃から、ＮＧＯを立ち上げようとも、慈善活動をしようとすら、思ったことも無かった。

3、車は、プランギ河にかかる橋のうえで速度をおとした。

車は、プランギ河にかかる橋のうえで速度をおとした。
橋から左手の下流を見ると、右手と異なって、視界に山並みは無く、森林も無く、ただひたすら広大な緑地帯のなかに、とうとうと大河が流れこんでいくのだった。
この先が、リグアサン湿原か！
リグアサン湿原は、東南アジア最大の湿原と言われているようだけれども、とにかく広い。橋から見渡すと、天気の良い日にだけ、はるか彼方の地平線に、青白く山々がかすんで見える。それが対岸だから、その広大さは推して知るべし、気が遠くなような気持ちにさせる。
しかも、湿原は驚くほど自然が豊かで、巨大な鯉や雷魚やナマズをはじめとする淡水魚が住んでいて、数千人の漁民が生活しているという。
いるのは魚ばかりでは無い。多くの野生動物も生息していて、とりわけワニは、信じられないほど大きく、ギネスブックに登録されている世界最大のワニは、８メートルもありミンダナオ生まれだ。
野鳥も豊富で、国鳥の白頭鷲をはじめカワセミなどもいて、漁舟に乗って中に入ると、数万年前から変わることの無い自然が感じられ、自然愛好家には涎垂ものの地域だ。
なかにはたくさんの集落が散在しており、人々は、木づくりの小舟で移動してはいるものの、イスラム反政府勢力の拠点でも有り、現地の人々でもおいそれと足を踏み入れることが出来る場所ではない。
それ故に、自然が保護されてきたとも言えるのだが、外国人に

いたっては、足を踏み入れることの出来ない未踏の危険地帯となっている。
マニラに住む人々は、ミンダナオを恐れているが、ミンダナオに住む人々にとっても、ここは最も恐ろしい地域のひとつで、その後この地で活動するようになってからも、現地を知る人々から、しばしば忠告を受けた。
「国道沿いならまだしも、湿原沿いの地域やＡＲＭＭと呼ばれるイスラム自治区には、入らない方が良い。」
「特に、舟で湿原地帯にだけは入らないように。誘拐されて連れ去られても、探し出す手段がないからね。」
１０年後の今でこそ、ミンダナオ子ども図書館は、自分たちの木舟をもち、ＮＧＯとしてはおそらく唯一、この湿原の内部でも継続的に活動し、舟でしか行けない集落に保育所を建設したり、奨学生をとったり、医療で患者を運んだりしているが・・・。
どうしてそのようなことが可能になったのかを、これからゆっくりと話していこう。

４，プランギ河を渡ったとたん、風景は一転した。

ミンダナオの母なる大河、プランギを渡ったとたん、風 景は一転した。
「なんだこれは？」
今まで続いてきた、平和な田園風景のあちらこちらに、避難生活をしている難民たちの姿が現れだしたのだ。
ピキットに向かって走る車の両側、国道沿いのわずかな空き地に、着の身着のままの姿で生活をしている。それは、避難小屋などとはとても呼べないようなしろものだった。
１畳か、良くて３畳半ぐらいのスペースにござを引き、どこからか採って来たかわからない木の枝を四方に立てて柱にして、そのうえに青いビニールシートを被せて屋根がわりにしている。
ビニールシートを買うことが出来る家族は良い方で、多くの家族が、ヤシの葉を重ねておいた下で生活している。

車でピキットに向かうにつれて、その数は瞬く間に増えだした。少し小高い国道を走りながら見わたすと、道沿いだけではなく、両側の牧草地のような農地にも避難民の仮小屋は広がっている。しかもその数が半端ではない。見渡す限り地平線まで避難民なのだ。

「難民キャンプ」というのは、キャンプという言葉から想像していたように、戦争で避難してきた人々を、特定の空き地なりにテントをはって収容する施設であり、そこにいけば、医療や食料も用意されている場所であると思いこんでいただけに、初めて見る避難者の状況に強ショックを受けた。

確かに、場所によっては、特定の空き地などに集められてはいるものの、そのほとんどは、国道沿いどころか農地から川沿いにいたるあらゆる場所に、雨よけのシートを張って生活しているのだ。

後にわかったことだが、２０００年にエストラーダ大統領のもと、フィリピン軍とアメリカ軍の合同演習（バリカタン）があった。しかし、演習というのは名ばかりで、事実上の実戦が起こり、１００万人以上の人々が避難民となった。ぼくが、この地に連れて行かれたのは２００１年の初めのころの事だから、このときの避難民を見たことになる。

5，隣人を放っておけないでしょう。

車は、ピキットの市内に入る手前のパガルガン・ピキットで止まった。

「ここはＡＲＭＭといって、フィリピン政府から半ば独立したイスラム自治区です。あの白い建物が役所。でも、一般の州とちがって、警察や軍の管理下に入りにくい地域なので気をつけてください。絶対にわたしたちから離れないように。身代金目的の誘拐が起こっても、少しもおかしくはない場所ですから。」

バリエス司教は、そう言うと、車から下りた。

後ろの荷台から、数人のおつきの者たちが飛び降りて、すぐに

司教の周囲を囲んだ。ぼくたちも、車から下りると、その仲間に加わった。

目の前には、一階建ての白い役所の建物が見える。しかし、役所のまわりにはこれといった家もなく、店もなく、町といった感じはまったくない。

それどころか、役所の庭にも、広場の大木の下にも、穴だらけの国道沿いにも、どこにもかしこにも青いビニールシートがはられ、避難民たちが、シートの下にしゃがみこんだっきりボーッとしている。

そのころぼくは、ミンダナオの歴史については何も知らず、司教が言ったイスラム自治区（ＡＲＭＭ）が、モロ民族解放戦線（ＭＮＬＦ）の３０年にわたる独立闘争のすえに、１９９０年に成立した、イスラム教徒による自治区であることも知らなかった。

自治区というのは、政府が特別にモロ民族解放戦線の自治にゆだねた場所のことだ。それだけに、ぼくが誘拐されたとしても、フィリピン政府の手が入りきらない可能性の高い地域なのだ。

司教はさらに言葉をつづけた。

「さっき、大きな河をわたりましたね。この先にも河がある。この町の左手奥にはリグアサン大湿原が広がっているんです。もしここで誘拐されて、手足を縛られたまま目隠しされて、小舟に乗せられ、反政府ゲリラのいる島に運ばれても、誰も救い出すことができない。湿原地帯は、ゲリラたちの拠点なのです。」

ぼくは、フィリピンに来る前まで、ミンダナオ島に、イスラム教徒がいることすら知らなかった。そんなぼくが、今目の前にしている戦争避難民の置かれている状況を目の当たりにして、「その原因が何か」を理解しようにもできなかった。

日本の世界史の教科書は、フィリピンには、３００年前にスペイン人が入植し、キリスト教がもたらされ、アジアでは珍しいカトリックが多い国であることは書かれていても、それよりもさらに１００年前に、すでにミンダナオにはイスラム教が布教され、フィリピンでは初めての王朝が出来ていたことなど知る由もない。

役所の方から、小太りの女性が近づいてきた。案内をしてくださるソーシャルワーカーだという。

その女性の後について、ぼくらは、難民キャンプと呼ばれているこの一帯を歩き始めた。
歩きながらまわりを見ると、疲れ果てたような女の人、そして子どもとお年寄りがほとんどだ。なかにはシートの下から出て木陰で話をしている人もいるが、午後の炎天下のせいか、ほとんどの人がシートの下にこもっている。
「男の人たちは、どうしているんですか。」
ぼくが、同行者の女性にたずねると、小太りで母親らしい女性は、こう答えた。
「そうですね。土地があるひとは、危険をおかして自分の畑にもどって、植えた野菜が少しでも残っていないか、探しにいっているかもしれないけれど・・・」
しばらく沈黙したあと、彼女は、少し言葉を濁すように言った。
「多くの男性たちは、戦っているのです。」
「えっ。」
イスラムの男性たちは、普段は漁民や農民たちなのだが、戦争がおこると、妻子を難民キャンプに残して、戦場におもむくというのだ。確かに、ここに残っているのは、女性と子どもたち。男といえば、老人か少年たちで、日本の中高生にあたる若者たちもほとんど見かけることはなかった。
彼らが、戦っているとしたならば、正規軍ではないはずだから・・・。
たしかに、周辺の山々からは、散発的に大砲の音がドドーン、ドドーンと聞こえてくる。
子どもたちも、大人たちも、そうした砲声には慣れきっているのか、避難シートに座ったまま、大砲の音がしても、特別な反応をしめすこともなくぼんやりとしている。
バリエス司教は、案内の女性にたずねた。
「ピキット教会のライソン神父は、どうしていますか?」
女性は、三つ又に編んで後ろにゆわえた髪を、左手でたくし上げながら言った。
「いま、教会仲間で、市のソーシャルワーカでもあるグレイスさんといっしょに、戦闘地のなかを駆け回っていますよ。村に残

された子どもや女性を助けるために！」
「残された子どもや女性って！なぜ難民キャンプに収容しないんですか？」
おつきの者が、驚いてたずねた。
「一部の村は、反政府ゲリラよりだという理由で、町の難民キャンプにも入れさせないのです。」
「それは、ひどい！」
「それで、教会の神父や教会員が、命がけで救済に向かっているというのですね。」
「ええ、そうです。時には、爆弾の落ちるなかを！」
ぼくには、驚くべき話だった。
ミンダナオでは、クリスチャンとイスラム教徒は、てっきり反目しているのだと思っていた。
ぼくは、その女性にたずねた。
「つまり、カトリックの信者が、反政府組織と呼ばれているイスラムの人々を、命がけで救済しているというのですか？」
「そうです。隣人を放っておけないでしょう。」
「今、起こっているのは、宗教戦争ではないのですね。」
困惑したような顔をしている女性を見て、バリエス司教が言った。
「現地では、クリスチャンもイスラム教徒も、比較的仲良くやっているんですよ。特に、ここからコタバトにいたるイスラム地域で、戦前から長く活動してきたオブレート会はね。」
案内の女性が言葉を継いだ。
「第二次世界大戦中に、日本軍がここに攻めてきたときに、イスラムの人々をかくまって助けたのも、オブレート会の神父たちだったんです。
隣のピキットの街中には、日本軍が駐留していたスペイン時代の要塞跡がありますよ。地下にはいくつもの防空壕があって、遺骨や遺品が残っているようだけれども、何しろここが、危険地域なので、いまだに日本政府も調査団を派遣できないでいるのです。
まさにここが、日本軍と米軍の激戦地で、いまだに湿原地帯には、当時逃げた日本兵の末裔がいますよ。イスラム教徒になって

いますがね・・・。」
ぼくの父方の叔父も、ミンダナオではないけれども、レイテ島で戦死している。海軍の医師で、スペイン語もたんのうで踊りもうまく、ずいぶん現地でモテたらしい。遺体も何も見つかっていない。
これは、後になって、ぼくたちが現地で活動し始めて、起こったことだけれども、病気を治してあげたイスラム教徒の子どものお父さんが、ぼくの耳元で、「自分の祖父は日本兵だった」、と語ってくれたことがあった。同様のことは、山岳地域に住む先住民のマノボ族の人々からもしばしば聞いた。
さすがにショックだった。
日本の隣の国で、大量の避難民が出るような戦争が、起こっているなどとは、想像もできないことだったし、それがすでに４０年間、３年から５年おきに大きな戦闘をくり返して現在にいたっていたなんて。
しかもその間、多くの人々が殺され、国連の調べでは、累計では、世界でも最大規模の大量避難民が出ていたなんて・・・。
宗教対立ではないとしたなら、いったい何が原因なのだろう。
蒼いビニールシートの下で、呆然と座っている避難民たちを目の前にしていると、世界で起こっていることに対する、自分の無知を知らされると同時に、様々な疑問が、翼をもった妖怪のように頭の中を駆け巡った。
しかし、避難民のとりわけ子どもたちの顔を見ると、「とにかく、まずは、何とかしてあげなければならない！」という気持ちの方が、疑問を押しのけて湧いてくるのだった。
戦争の根本的な理由などを探るのは、後の事だ。それよりもまず、この子たちを何とかしてあげなくては！
なぜか、戦争の原因に関しては、触れてはならない、タブーのようなものがあるような気がしたこともあり、これ以上はたずねることなく、ぼくたちは、難民キャンプの中を歩いて行った。
戦争の原因は、当時想像できないようなところにあり、答えを見つけることが出来たのは、かなりのちになってからの事だ。

６，フィリピンといえば、日本の隣の国。

フィリピンといえば、日本の南隣りにある島国で、調べてみると島数は、なんと７１０７もあるという。

北の大きな島はルソン島。南の大島はミンダナオで、ミンダナオ島の大きさは北海道と四国を合わせたくらい。

古代からすでに南米からインディオたちが黒潮に乗って、ミクロネシア、メラネシアに到達していた。

南米のインディオたちが筏に乗って、イースター島を経由してミクロネシアやポリネシアにまで来たことを、実践して証明しようとした人類学者が、ノルウェー出身のトール・ヘイエルダール。

彼は、当時の記録にしたがって自ら筏を建造して、南米からミクロネシアに向かって冒険航海をしとげたが、そのときの記録が『コンチキ号漂流記』。

ぼくも、小学校高学年の時に、児童文学で読んで、南洋の冒険に憧れたことを思い出す。そのときの記憶があこがれとなって、無意識のうちに今の活動にもつながっているような気がする時がある。

フィリピンの民族構成は、南洋の島々から渡ってきたミクロネシアとポリネシア系に、大陸の南、マレー半島から渡ってきたマレー系の民族が混ざっているいるのだと言う。

３００年前、ヨーロッパからスペイン系のキリスト教徒がやってきて、フィリピンを植民地化するすでに１００年以上前、マレーシアからイスラム教徒がミンダナオ島に入ってきて、西海岸のコタバトに王国を築いていたという。まだそのころは、フィリピンに王国というものはなかったから、フィリピン最初王国はイスラム国家だったのだ。

そのころすでに、ボルネオからインドネシアにいたる南シナ海一帯の島々は、イスラム教徒が活躍する商業文化圏だったというから、マレー半島からイスラム教をもたらしたのは、マレー系の人々だったろう。

確かに、ミンダナオ島で活動していると、かつて平地にすんでいて、今は山岳地帯に追われた先住民族のマノボ族やバゴボ族、ビラーアン族やマンダヤ族は、（ミンダナオには、約十二部族があって、それぞれ言語が違うという）原住民とよばれていて、色黒で小柄で髪の毛がチリチリしていて、ミクロネシアやポリネシアの島民に似ている。たぶん古代から、黒潮に乗ってわたってきた南方系の住民たちの血が混ざっているだろう。

そこに大陸の南から、比較的色白で背が高く、髪がまっすぐなマレー系の人々が入ってきて混血し、現在のフィリピン人の基礎ができたと考えられる。

確かに、ミンダナオの西に多いイスラム教徒や、島外のセブやルソンから移住してきた人々も、高地の原住民と呼ばれる人々とは多生異なっていて、髪の毛がまっすぐで背も多少高く、色もそれほど黒くない。

これらの古代の人々は、近代にいたるまで、筏や舟をあやつって、漁をしながら黒潮に乗って、フィリピンからさらに台湾や沖縄列島をぬけて、日本にまでやって来たと言われているから、フィリピンは、古代から日本とも深い関係を持っている国なのだ。

もちろんそれ以外にも、中国大陸から、中華系の人々がたくさん移民してきているし、スペイン人との混血もいるし、ミンダナオの場合は、さらに日本人がダバオ地域に入植しているから、現在のフィリピン人は、それらが総合的に集まった種族の吹きだまりと考えられる。

日本人の祖先の血には、太古の昔から、フィリピンを抜けて、黒潮に乗って沖縄列島を上って鹿児島に上陸し、九州や四国に広がっていった、南方のミクロネシア、メラネシアとマレー系の海洋民族の血が入っているということは、遺伝学的に確かなようだ。

加えて北からは、シベリア大陸から樺太を抜けてやってきたアイヌ系の民族がいて、東北では蝦夷と呼ばれて、関東から中部地方にまで広がっていた。

彼らは、後の時代に、大陸から移動してきて稲作を広めた弥生系と、その後の大和朝廷の蝦夷征伐によって、北に追われる前まで、縄文文化を形成し、諏訪の御柱の祭りなどは、そうした縄文

文化の名残を残しているという。
さらに弥生時代には、大陸から今の朝鮮中国系さらにモンゴル系の人々が、朝鮮半島を抜けて北九州や出雲地域に上陸し、稲作文化を伝えていった。
その後、大和時代には、琵琶湖をわたって南下し近江にたっし、そこから京都や奈良に入っていき、天皇家を中心にして大和国家を形成し、北方の蝦夷征伐を進めていった。
ぼくの父方の先祖は、近江商人だというから、おそらくは古代大陸から来た朝鮮中国系で、母の方は能登だから、縄文系かもしれない。
そんな歴史をかえりみると、日本人は単一民族だなどというのは、とんでもない話であって、フィリピン同様に、ユーラシア大陸の東の端の、民族吹き溜まり列島だったといえよう。
特に、沖縄の南部の島々は、地図で見ると日本本土よりもフィリピンに近く、沖縄文化は、アイヌや蝦夷、大和文化とも異なって、本当にミンダナオの文化とよくにている。

7、高校時代は、ほとんど引きこもり状態で

事実、ミンダナオと沖縄のつながりは深く、おそらくは太古の昔にまでさかのぼるのだろうけれども、近年においても、ミンダナオには、戦前まで東洋一の日本人町があった。ダバオやカリナンには、２０万人を超える日本人が住んでいて、特に沖縄や鹿児島出身の人々が多く、現地のマノボ族やバゴボ族と結婚して、マニラ麻を栽培していた。
ぼくは、中学高校のころから、学校の授業で得られる知識には、あまり興味がわかないで、自分で気に入った本を読み漁る方だったけれども、読書に熱中しているときは、今から考えると精神的にはほとんど引きこもり状態で、小学生の頃からはじまった経済の高度成長とともに人々が、本来の人間性を失っていくような感じがして、しだいにこの世に嫌気がさすと同時に、死について感じ考え続けた。

ミヒャエル・エンデの書いた児童文学『モモ』の灰色の男たちが、町中を徒党を組んでうろつき回り始めた感じだ。

高校時代は、ヘルマン・ヘッセやトーマスマン、ドストエフスキーやサガンなどの小説もよんだけれども、キルケゴールやニーチェといった哲学書にも興味をもった。実存と死との関係を考察するのに役立った。

キースジャレットのジャズや岡林信康のフォーク、そしてモーツアルトもよく聞いた。アルフレート・アインシュタインのモーツアルト論を読んで、死に関する手紙を知り、芸術と死との関係についても考えた。

７０年代の学生紛争が盛んな頃で、高校の友人などは、学校封鎖を行ったりもしたが、ぼくは右にも左にも進むことなく、第三の道を探求した。虚無の背後にある死の探求。結果的に今考えると、引きこもりで厭世的、実存主義的で無宗教。

そして、一人死を越えるために、死を正視し、死に戦いを挑もうとして、意識的に死に向かって歩き続け、最後の死の恐怖と精神の崩壊の瀬戸際に立った。

台地は大きく揺れ動き、発狂と自殺衝動の寸前に枕元に黒い女性があらわれ、ぼくに言った。

「あなたは、じゅうぶんやったんだから、今は休みなさい。」

非現実的な体験だったが、死を超える愛の実体験で、死の瀬戸際で自分の命が救われたことを知った。

自分が何故救われたのかわからなかったが、その後、世界が輝きだした。人間の作った文明は輝かなかったが、自然界や人、特に子どもたちは光のように輝きだした。アルバート・アインシュタインの相対性理論を思い出しながら、この世は光の収縮と膨張で形成されているのかと思い始めたのは、この時期だ。

その影響もあって、大学では、授業にはあまり関心はなかったけれども、木村直司教授のもとで、ゲーテの錬金術的な宇宙像をテーマに論文を書いた後、欧州でふらふらしながら、日本に戻ってきた後に、日本を含むアジアの宇宙観に関心をもちはじめた。

というのも、ヨーロッパの中世錬金術的な宇宙像を深く探求すればするほどに、心理学者のユングが『心理学と錬金術』やゼー

デルマイヤーが『中心の喪失』などの建築理論で述べているように、西欧思想も、元はといえば中国の陰陽五行などともつながっていることがわかってきて、ウノ・ハルバの『シャマニズム』などを読みさらにそれを深めていくと、農耕牧畜文化以前の狩猟採集文化の宇宙像が土台になっていることが見えてきたので、日本で絵本の編集者をしつつ、シベリアのシャマニズムを通して、北海道のアイヌ文化に惹かれていった。

アイヌ文化に引かれた理由は、日本の民族文化の中に、世界に通じる驚くべき世界観がやどっていて、物質文明に犯されて行きづまった今の文明を乗り越えて、２１世紀からはじまる新たな文明を拓く、基盤となる宇宙像があると感じたからだ。

編集の仕事はおもしろかったが、本を通して物事を見ることに飽きてしまい、実体験をもとめて出版社を辞めて、北海道に移住し、先住民族のアイヌの古老を訪ねては話を聞き、その体験は、『火の神の懐にて』という本にまとめた。

その後、精霊の導きによってか、ぐうぜん沖縄の宮古島の離島、池間島に滞在して、神謡とともに生きる古老の心にやどる死生観、宇宙像（コスモロジー）を聞き取りして、それらをまとめて『沖縄の宇宙像』という本も書いた。

そのとき池間島にいた前泊徳正おじいが、池間のこの辺の漁師たちは、ミンダナオを超えてボルネオまで漁をしに、昔から今でも舟で行くよ、と言っていたのを思い出す。

沖縄的でミンダナオ的な思考をすれば、そのころから、妖精たちが、ぼくを次には、ミンダナオに放りこもうと準備していたのではないかと思う。

8，こんなに、神事を知ったら、あんた死ぬはず。

沖縄とくに宮古島や石垣島の人々にとっては、フィリピン人は、台湾人とともに、大和人よりも地理的歴史的にはるかに近い隣人たちだ。精霊を信じて生きている生き方や、隣近所とのコミュニティーの関係も食べ物すらも・・・。

宮古の池間島にいると、石垣沿いに小さな家の中が見え、数人の人が集まって泡盛を飲んでいる。すると、おばあの一人が、通りすがりのぼくを見つけて言う。

「ジャー、アソビッタイ、アソビッタイ。」

「さあさあ、中に入っておいで、いっしょに飲んで食べて、踊っておゆき。」

ミンダナオの小道をゆき、外のプロックという掘っ建てで、数人あつまって食べて飲んでいると、必ず同じ声がかかる。

「カオンナ、カオンナ、リンコッドナ。」

「食べな、食べな。休んでゆきな。」

沖縄で過ごしたことのあるぼくには、何しろ食べ物が沖縄とそっくりで、全く外国に来た気がしない。

基本は、塩のきつい干し魚と塩からだが、ニガウリを使った炒め物のゴーヤチャンプルや煮込みうどん等々、実に沖縄料理とよく似ている。素材の下味を重視して、ニンニク、小型のタマネギ、小型のトマト、ショウガを使うところから、お酢にニンニクとショウガ、唐辛子を入れた調味料。カボスを醤油にいれて小さな唐辛子をおいてつぶす作法まで、本当にそっくりだ。

マグロの刺身をキュウリとお酢であえた刺身もうまいし、お菓子に至っては、チマキ（ミンダナオではバナナの葉で包む）や芋ようかんなど、和菓子の原型と思われるものがたくさんあって、ベースがあまりに日本食に近いので人によっては特色がないなどと言うが、日本食の土台に、世界の美味料理の中華料理とスペイン料理がまざったようで、実においしく飽きがこない。

沖縄では、ウタキを中心に死生観や神事についても聞き取りをして、『沖縄の宇宙像』という本にまとめたが、そういえば、沖縄のウタキと呼ばれる神聖な場所を守っているおばあの一人が、ぼくが沖縄の神々の世界を解き明かす本を書いた後に言った言葉が忘れられない。

「こんなに、神事を知ったら、あんた死ぬはず。」

死にはしないで、今も生きているけれども、確かにその後、落ちこんで鬱状態になって、それがきっかけで北海道の神父さんに「どこか、アジアの国に久しぶりに行って、気分転換をしたいと

思うのですが、」と話したら。
「アジアはよく知らないけれども、ミンダナオなら同僚の神父が、孤児施設にいるから、紹介は出来るよ。」と言われた。
フィリピンは、あまりアジア的だと思えなかったし、特に関心がある国ではなかったけれども、「孤児施設」と言う言葉に惹かれて、行ってみようと決心した。若いときから、子ども好きだったこともあって。
今思うと、亡くなった沖縄のおじいやおばあ、アイヌの古老や精霊たちが、ぼくが無駄に命を落とさないために、ミンダナオに投げこんでくれたのかなあと思わずにはいられない。